

総合コース①	
実施日	2012 年 9 月 8 日(土)14 : 00～16 : 30
会場	奈良市ボランティアインフォメーションセンター
講師	西山 厚先生(奈良国立博物館学芸部長)
テーマ	大仏に学ぶ

皆さん、こんにちは。私は NPO とは全く関係がない、そういう活動をやっているわけでもない。そういう意味では、皆さんの直接的な興味関心、あるいは課題にストレートにヒットするような話になるかどうかは分かりません。

私は 16 年京都に住んでいて奈良にやって来ました。京都にいる時は、京都がとても好きでした。奈良に来ることはめったになかったんですが、奈良国立博物館に就職して奈良にやって来ました。

やがて 2 年ほどして、徐々に奈良の良さというものが分かってきました。私は今、奈良は世界で最も素晴らしいものがある場所だということを確信しています。と同時に、奈良にはさまざまな問題点、課題、足りないところもあるということがよく分かってきました。でも、色々な問題点があるというのは、とても幸せなことです。そこで何かができるわけですから。私は、奈良を変え、さらにちょっと大きく言えば、日本を変えようと思っています。どうやって奈良を変え、日本を変えるか。

奈良にはとても素晴らしいものがある。それを奈良の人が、さらに日本人全員が本当に知れば、奈良が変わり、日本が変わる。夢のようなことを信じて、小さな子どもたちに対してそういう実践をこの十数年やってきました。特に幼稚園の子どもたちに奈良の素晴らしさを伝えるという活動をやっています。聖武天皇がどうして大仏を造ったのか、お水取りというものがどうして行われているのか、をお話しするわけですが、奈良に住んでいる大人のおそらく 9 割は知らないことを、幼稚園の子どもたちは完璧に理解しています。そして聞いて理解したことを家に帰って、お父さんお母さんに語り伝えるということをやってくれるんです。

子どもたちに話をする一番大きなテーマはやはり大仏さんのことです。大仏は小さな子どもでもよく知っているし、そしてこの大仏をめぐるさまざまな出来事は、とても分かりやすい。短い時間で非常に強いインパクトを与えることができる。今日お話しすることも幼稚園の子どもに話していることと基本的には同じです。本当に大事なことは誰にとっても大事なはずですから、それだけを語ればいいわけです。だから私は、3 歳から 115 歳までの人に同じ話をするという原則を持っていて、そんな実践をずっとやってきております。

今日は「大仏に学ぶ」というテーマで、特に公慶上人という方が、300 年ほど前に大仏さんを復興し、大仏殿を再建したお話をさせていただきます。その中で、何かを感じていただくことができれば大変幸いに思います。

一昨年は平城遷都 1300 年でいろんな事業が行われました。全国から大勢の方がやって来ました。しかしこの 1300 年の奈良の歴史の中で一番宿泊者の数が多かった日はいつでしょうか。これは 1692 年 3

月 27 日です。宿泊者は 49,054 人で、これがいままでの最高記録。今奈良に 49,000 人の人が来て泊まりたいと言ったって泊まるできません。

奈良県は、全国 47 都道府県の中で、ホテル・旅館の部屋数が一番少ないそうです。だから奈良に来て泊まる場所がなく、京都や大阪や外で泊まるということがよく言われています。奈良の大きな問題点の 1 つです。でも 1692 年 3 月 27 日には 49,054 人が泊まっていたんです。どうしてそんなことが可能だったのでしょうか。なぜそんな多くの人々が奈良に来て、奈良に泊まったのでしょうか。300 年前に出来たことが、どうして 21 世紀の今、出来ないのでしょうか。おかしいですね。出来ないのは何か問題があるからですね。歴史から学ぶというのは、なかなかありがたいことです。前例があるわけですから。改善すべきところは、改善したらいいわけですね。

奈良が観光都市になったのは、まさにその 1692 年でした。奈良はそれまで観光都市ではありませんでした。どうして 1692 年から奈良が観光都市になり、人が来たかというと、公慶上人が大仏を復興したからです。公慶上人とはいったいどんな人なのか、どうして大仏を復興することになったのか、どうやって大仏を復興したのか、なぜそこに大勢の人が来たのか。それを知るとすごく勉強になりますね。私たちが今、何を考え、何をしたらいいか、非常に大きなヒントになります。

にもかかわらず、奈良に住むほとんどの人が公慶さんを知らない。どうして学ばないのでしょうか。私は、幼稚園の子どもに公慶さんの話を十数年やってきています。だからあと 30 年たったら変わりますよ。奈良の子どもたちはみんな知っている。知らないのは大人だけ。やがて奈良は変わることになると私は思っていますが、今日はそういう話をここでやってみたいと思っています。

「大仏に学ぶ 公慶上人の大仏復興」。大仏殿、高さは 47 メートル。木造建築とすれば世界最大級の建物。奈良時代に聖武天皇が大仏を造ったわけですが、大仏は 2 回焼かれました。その時大仏殿も焼け、今の大仏殿はおよそ 300 年前に再建されたものです。この中に大仏さんが座っています。顔の色と体の色が違います。顔には艶があるけれど、体には艶がない。ご存じでしたか、皆さん。大仏殿には毎年 200 万人以上の人々が来ますが、おそらく 99% の人が顔と体の違いに気付かないと思います。どうしてこんなふうに違っているのか。

奈良時代に聖武天皇が大仏と大仏殿を造った。やがてそれは焼かれた。誰が焼いたのか。今年の NHK の大河ドラマの主人公、平清盛です。平清盛が東大寺と興福寺を焼けと命じました。そして清盛の息子、重衡が、京都から攻めてきて火を付けた。そして東大寺、興福寺のほぼ全てが焼けてしまいました。東大寺は山の上にありますね。二月堂、三月堂。山の上は焼けなかった。興福寺は山がありませんから壊滅です。東大寺は山の上の建物と転害門という門が無事だった。そしてあとは正倉院。正倉院は焼けなかったんですね。私の勤めております奈良国立博物館では、毎年秋に正倉院展です。これは奈良の、奈良市の一番大きなイベントですからね。

世界中に博物館・美術館は無数にあり展覧会をやっています。その中で一番混んでいるのが正倉院展です。統計的にも 1 日平均の入館者数が世界一です。ただし正倉院展は 17 日間と短い。全体の数では

もっと多い展覧会はいくらでもありますけれども、1 日平均では世界で一番混んでいる。その正倉院はこの時焼けなかった。だから毎年正倉院展を今行うことができ、奈良に大勢の人たちがやって来る。

いずれにしろ、この時に大仏殿にも火が掛かった。これは、大仏殿が焼けている様子をそれから 400 年ほど経ってから描かれた絵巻物の一巻ですが、大仏殿の中に、人間の姿が見えます。平家物語を読むと、1,000 人の人がこの中に隠れていたと書いてあります。おそらく大仏様のそばにいれば助かる、大仏様のそばにいれば安全だと思ったのでしょう。やがて大仏殿に火が掛かり、大仏殿は焼け落ちた。そして、1,000 人の人もみんな焼け死にました。大仏様の頭は溶けて地面に落ち、両手も溶けて地面に落ち、焼け跡に巨大な銅の塊が残っているだけでした。

その時の大仏様は、重源というお坊さんが再建した。今、奈良国立博物館では「頼朝と重源」という特別展をやっております。それは平清盛が焼いた大仏、大仏殿、そして東大寺を重源というお坊さんが、頼朝の応援をもらいながらどうやって復興していったかという展覧会です。奈良に住み奈良で活動する人にとって、この「頼朝と重源」展は見なければならぬ展覧会だと思っています。

さらにいえば、この 4 月、5 月には「解脱上人貞慶」という特別展をやっていました。鎌倉時代に元気のなかった奈良を、貞慶という人が元気にしたんです。その貞慶が亡くなって今年は 800 年。それを記念した展覧会だったのです。

例えば、唐招提寺。鎌倉時代の初め、唐招提寺はほぼ潰れかけていました。お坊さんはゼロでした。でも今もある。それは貞慶が復興したからです。貞慶は釈迦念仏会という行事を始めました。今もやっています。10 月の 21、22、23 だったかな。それは今から 810 年前に貞慶が始めた行事です。やがて 40～50 年経ったときに釈迦念仏会の本尊として、釈迦如来像を作ろうということになった。その仏像を作るのに協力した人は 1 万人です。坊さんゼロでほぼ潰れかけていた唐招提寺が、貞慶さんが釈迦念仏会を始めて 40～50 年経つと、1 万人の人が集まって 1 つの仏像を作る寺に変わっていたんですね。どうやったんでしょうか。そういう展覧会でした。

奈良国立博物館はそういう展覧会をずっとやり続けている。そして今は「頼朝と重源」。重源が頑張って、大仏をまた造ってくれた。そして大仏殿も建ててくれたのに、また焼かれます。今度は戦国時代。平家に焼かれた時は、およそ 3 年で大仏は再建されました。それから 10 年で大仏殿もできました。ところが戦国時代に焼かれた時は、100 年たってもできなかったんです。

これはその頃の絵ですが、100 年できなかったのに、大仏さんが座っています。大仏はいるじゃないか、と思われませんが、実は顔が木で造られた仮のお顔だったんです。体は何とか先に造っていたんです。体を造っておいて何で顔を造らないのか、それは丈夫な体を造れなかったからです。奈良時代は大仏を造れましたが、平家に焼かれた鎌倉時代は大仏を造れませんでした。それで重源は中国には金属で大きな仏像を造る技術があったので、中国人を呼び造ってもらったんです。

そして戦国時代に焼かれた時も、日本人だけで体は造ってみました。でも丈夫に造れませんでした。頭が大きくて重いんです。乗せたら、ぺしゃっとつぶれてしまう。でも顔無し大仏が座っているのは、気の毒なんで、軽い木で顔を造ってそれを乗せました。そして大仏殿は造らなかった。この状態で 100

年以上が過ぎていきます。

雨が降るとずぶ濡れ、奈良の人たちはそれでいいと思っていたわけではありませんが、造成には、ものすごいお金と人手がかかる。それで 100 年以上が過ぎました。織田信長も徳川家康もやりかけて駄目だった。

その時、公慶というお坊さんが登場します。この人は別にお金を集めたりする専門家じゃありません。東大寺の学僧です。公慶さんは 12 月 9 日、13 歳の時に東大寺のお坊さんになり、その 6 日後、大仏さんを参拝しました。その日は雨が降っていた。自分は傘をさしているのに大仏さんは大仏殿がないからずぶ濡れ。そして顔は木でできている。その時にこの少年は、「必ず僕が直す」と雨の中、大仏を押し大仏の修復と大仏殿の再興を誓います。子どもの時の誓いは、意外にその人の人生を決定づける場合があります。公慶さんはまさに、そういう人生をやがて送り始めます。

37 歳になった公慶さんは、日本中を周って寄付を集めようと考えます。それをするには幕府の許可がいります。幕府のお墨付きをちゃんともらっていれば、どこに行っても大丈夫です。だから公慶さんは江戸にまず向かいます。そして幕府に大仏殿再興・諸国勧進の許可と協力を乞う。幕府の役人からは相手にされませんでした。公慶さんは 1 カ月幕府に通い、最終的に諸国勧進の許可は下りましたが、協力はなし。

その時に日本中を回り「天下の仏心を集めて、一仏となす」という言葉を残しています。そして、日本中の人たちから仏心、具体的にはわずかな金額のお金を集めて、1 つの仏像、つまり大仏を造りたいんだということを言った。そして「大仏は天下の大仏にして吾の大仏にあらず」と、私の大仏じゃない、東大寺の大仏ではない、これは日本の大仏なんだということを言われた。だから、日本中の人たちから応援してもらって大仏を造ることが大事なんだ、というわけなんです。

奈良時代、聖武天皇は大仏を造る時、「大きな力で造るな」「たくさんの富で造るな」と言いました。あれだけの大きな物を造するためには莫大なお金がかかる。それは国家権力、国家予算を導入してする事業です。でも聖武天皇はわざわざ「大きな力で造るな。たくさんの富で造るな。1 本の草を持って来た人、一握りの土を持って来た人、そういう人たちと大仏を造りたい」と言った。このやり方、考え方で奈良に大仏ができたんですね。当時の記録を見ると、260 万人の人が大仏造りに関わった、となっています。260 万人、当時の日本の人口は推定 500 万人ですので、人口の半分が協力したことになります。つまり、小さな力をたくさん集めるというのが聖武天皇の考えで、これはこの後もずっと継承されていきます。今日申し上げた話はこれに尽きるんです。

平安時代 855 年に、大仏様の頭が落ちた。その頃地震が相次いでいて、脆くなっていたのでしょう。どすっと下に落ちてしまった。それをちゃんと載せてきれいにしたのは、真如というお坊さんでした。この真如さんは大仏修復をするときに「天下の人を令て、一文の銭、一合の米を論せず、力の多少に随い」と言っています。日本中の人々が 1 文、ほんのわずかなお金でもいいし、お米 1 合、わずかなお米でもいい。分量、金額はどうでもいい、自分ができること、力の多少に随い、大きな力を持っている人は大きなことをやってくれたらもちろんありがたいし、でも小さな力の人は小さな力を出してくれたらあ

りがたい、ということを使う。これはまさに聖武天皇と同じ考え方です。

そしてさらに「官物を用い、以て充て給えば、弘済の本願に乖かん」ということを言っています。弘済とは広く世の人を救うこと。官物、例えば奈良県市の予算でやったらみんなを幸せにできないと言うのです。みんながわずかなお金を出し合い、わずかな力を出し合ってこそ、広く世の中の人たちがみんな幸せになる、と。平安時代、こんな考えの人がいるんですね。そしてこれを実践したんです。

そして、その次に平家に焼かれました。それを重源が日本中を勧進します。重源は東大寺の坊さんではなくいろんな所で復興をやってきたプロです。そして 50 人のプロ仲間がいる。重源集団が復興をします。日本中を勧進する際、重源は「尺布寸鉄といえども」と勧進帳の中に記しています。尺布、1 尺の布。1 尺は約 30 センチ、30 センチの布なんて、ほとんど役に立ちません。1 寸の鉄。鉄釘 1 本とか、それでいい、それで充分。量の多少は関係なく気持ちが大事。これって、表現は違うけれども聖武天皇や真如と一緒に。小さな力をたくさん集める。

公慶さんも全国を勧進します。まず、大仏を修復するときには奈良、京都、この辺りを中心に回る。次に大仏殿になった時に、青森県から九州までずっと歩き回ることになります。公慶さんは重源みたいな復興のプロじゃない。それでも一人でやるのです。東大寺のお坊さんは他の人は誰もやらない。

私は、人間はたった 1 人で世界を変えられると思っています。たくさんの人と力を合わせてやることも、素晴らしいことですが、たくさんの人がいなければ出来ないというのは間違いです。やる気が無いか、もしくは能力が無いだけと私は思っているのです。たった 1 人で勧進を始めた勧進ですが、みんなどれくらいお金を出しているかという、ほとんどの人は 5 文です。5 文というのは今のお金で 125 円。大仏さんのお顔を修復するのに 12 億円かかりました。公慶さんは 125 円募金で 12 億を作った。そんなことが出来るんですね。

勧進にはこの杓を使うのです。勧進杓、ここにお金を入れてもらうんです。昔のお坊さんは、お金に触ってはいけないんです。これは実は鎌倉時代、平家に焼かれた時に復興した重源さんが鎌倉時代に使っていた杓なんです。それがちゃんと東大寺に残っていて、公慶さんはそれを借りて勧進を始めます。この杓は今も東大寺に残っています。

そしてこの鉦鼓というものを使う。首からこんなふうにかけて、そしてこの T 字形のものでこうガンガンと鳴らしながら、これも実は重源さんが使っていたやつなんです。それをまた公慶さんは借りました。4 年後、まだ大仏のお顔修復は出来ていませんが、大仏殿の再建の準備も始めます。1,000 人の僧侶と 500 人の大工さんを招いて、盛大な手斧始めの儀式を行った。これは、私には思い付かないことですが、大仏様の勧進を始めて 4 年、まだ大仏さんは出来ていないのに大仏殿を建て始める儀式だけを行ったんですね。その時に大勢の人が東大寺に来て、東大寺で簡単な弁当を出しました。弁当を食べた人は 57,160 人余りだったということです。ものすごいお金を使っていますね。でも寄付が 1,000 両、今のお金で 1 億円あったんです。だからすごく大きな収入となりました。それを大仏修復に投入します。公慶さんは非常に優れた学問僧でもあり同時に非常に優れたプランナー、プロデューサーでした。

ちなみに、大仏さんの体の中は、ジャングルジムみたいに木が組んでいます。100年間で雨が流れ込み、木組みもかなり腐ってしまいました。その木組みを使って小さな仏像を1,000体作ったんです。それをお世話になった人に差し上げる。うちの1体が興福院に残っています。

これは京都で公慶さんが勧進をしたときの地図です。碁盤の目のように道路が走っていますが、勧進した通りは赤く塗ってある。ということは、ほぼ全部です。しらみつぶし方式で全ての家を回っていったのです。元禄4年、1691年、閏8月6日から9月24日まで京都を勧進します。およそ1カ月半にわたって京都をくまなく回ったんですね。

ちょうどその最中、閏8月11日に八幡宮の堂屋を完成と。山を登って行って三月堂の隣に手向山八幡という神社がありますが、公慶さんはその造営もやっているんです。この年の8月11日に棟上げが行われ、8月26日に完成して、今この写真に見えている僧形八幡神像、このお像をご神体として祭ったんですね。それが1691年の閏8月26日、つまりこの勧進の最中です。実は、この8月25日にも京都で勧進しているんです。夕方まで勧進していて、そのあと奈良に帰ってきて、翌朝26日この遷宮の儀式を済ませ、またその日のうちに京都に戻って京都で勧進している。もちろん歩くしかありませんから歩いて移動するんですけど。「ちょっとやりすぎじゃないのか」という感じなんですけど。公慶さんはこんなことを毎日しているんですね。

大仏さんがいよいよ完成しました。完成というか、お顔がちゃんと元に戻りました。12億かけて。この大仏さんに魂を入れる大仏開眼がおこなわれました。どんなに苦勞して大きな仏像を造っても、造っただけではしょせん作り物なんです。魂を入れた時、初めて仏様になるのです。どうやって魂を入れるかという、偉いお坊さんが筆で瞳を入れるわけです。大仏開眼会を3月8日から4月8日まで1カ月間やりました。公慶さんは「もっと長くやりたい」と言ったんだけど、他の人たちが「勘弁してくれよ」と。どうして公慶さんは「長くやろう」と考えたかという、「大仏できました!」ということが多くの人に知れ渡るのに時間がかかります。わずか5文でも勧進に応じてくれた人、つまり大仏さんと縁を結んでくれた人にはみんな来てもらいたいわけです。情報が伝わる時間と行く段取りの時間、到着するまでの時間それを鑑みて、長くしようと考えたんです。

その1カ月間に東大寺に来て弁当を食べた人、本によって若干数字が違いますが、『大仏殿再建発願以来諸興隆略記』ではお坊さん1万2,899人、俗人が20万5,300人。『大仏殿再建記』では僧侶8,851人、俗人20万9,378人。ともあれ20万人が弁当を食べているのです。しかもこれは関係者が食べる分なので、やって来た人はもっと多いということです。

当時、奈良の人口は2万8,000人でした。そこに3月8日初日だけで10万人来たんです。それだけ大仏さんには力があるのです。そしてもう1つ。やはりこの勧進というやり方が良かったんだと思います。例えば、大金持ちが全てお金を出していたら、こんなに人は集まらないでしょう。多くの人たちから、ちっとも負担のかからない程度の小さな力、お金、物を応援していただいたおかげです。

でもその頃から奈良は他に行くところがないので、大仏を見てから若草山に登り、猿沢園の池に行き、

魚にえさをやる。やがてえさをやっても魚は嫌がって浮かんでこない、そしてえさを売っていた人もこの 1 カ月間で 1 千万収入を得たという記録も残っています。そして始めに申し上げた、3 月 27 日に奈良には 4 万 9,054 人が宿泊していた。これは正確な数字です。奉行所がチェックしているんで。もちろんこんなに泊まれません。昔も宿泊所を開業するのは営業許可が下りたところしかできないのですが、この時ばかりは、奉行所も「これはもうそんなことを言っている場合じゃない」とオール民宿 OK になり、誰がどこに何を泊めてもいいという状況になったんです。

1 カ月の法会の期間中、公慶さんはいろいろ仕掛けを打ちました。例えば日によって法要を担当する寺が違う仕掛けをしたのです。どうしてこの 3 月 27 日が一番多かったかというと、興福寺が担当したからです。明治になるまでは、実は東大寺よりも興福寺のほうがはるかに大きい。要するにこの日はベストの日なんですね。だから諸方より大勢の人たちがやって来て、奈良に泊まるのです。そして奈良で食べ、土産を買って帰るのです。この時から奈良は観光都市になるのです。でもこんなに毎日人が来ているから土産もあつという間に売り切れ。だから何でもいいからこの時に売ったんですよ。それで日本中に「奈良の土産は品質が悪い」という評判が立ったのです。そしていわゆるこの悪い意味での「大仏商法」という言葉も生まれるのです。でも私は「真の大仏商法」こそ、21 世紀の奈良が目指す道だと思っています、ますます大仏さんの価値が高まる一方だと私は思っています。

これはその大仏開眼の時の様子を描いた絵です。大仏殿はまだありません。そしてこの人は天皇の勅使です。こちらに座っているお坊さんは東大寺の別当。公慶さんはここにはいない。ここが大仏殿ですね。その前辺にちゃんと観客席が設けられていて、ここでお金を取り、収入が東大寺に入ります。公慶さんという人は本当にすごく信仰が篤く、学問に優れ、でもこういうことも両方出来る人なんですね。なかなか両方できる人は少ないですけど、公慶さんは実は両方できる珍しい人。

それから大仏殿の西側。これは実は天皇殿で、ここに聖武天皇が祀られていますが、ここは関係者が待機するスペースです。それで毎日いろんなお寺の人が来て。この屏風絵はいろんな日の様子を一緒に描いていて、これは 4 月 7 日、京都の極楽寺がやって来た様子を描いた部分。どうして極楽寺と分かるかというと、極楽寺のお坊さんたちはヒョウタンを持つなどちょっと様子が違うので分かります。

これは最終日 4 月 8 日。この三昧聖というのは、死んだ人を処理する差別をされている人たちです。そういう人たちは、普通は仲間には入れてもらえない人たちなんですが、公慶さんは最終日、お坊さんたちが終わったあと、三昧聖たちが最後に大仏の周りを行道するようにしたのです。

それから、ここには施薬所……病院。これだけ毎日何万人と来れば、体調を悪くする人は必ず出る。それで公慶さんは 60 人のお医者さんを待機させて、気分が悪くなった人を介抱したり、迷子センターもちゃんと用意している。子どもだけではなく、遠くからやって来て、人いっぱいだったら連れとはぐれるということは当然あり得る。その場合には「あの大きな旗が立っている所に集まるようにしてください」という目立つ集合場所を複数ちゃんと用意してあって。こういうところ、公慶さんは本当にいろいろ何でもよくできる配慮のある人なんです。

それから公慶さん自身のこの法要での役割ですが、毎朝大仏さんにご飯をお供えする役でした。白い

ご飯を山盛り、白米を 5 斗。10 合が 1 升で、10 升が 1 斗で、その 5 斗ですからすごい分量です。毎日午前 8 時頃に大仏様にご飯を供えている。公慶さんは何人かの人に担がれて輿に乗って、ここに山盛りご飯があるんですが。そして鉦鼓を打ち、「光明遍照」を唱えて、念仏を唱える。大仏さんの前で「南無阿弥陀仏」と念仏を唱える。大鐘が 2 度打ち鳴らされる合図は、この山の上にある国宝の大きな釣鐘を鳴らすんですね。それを合図に数万人の参詣の人々が念仏を繰り返す。

とにかく、昔は大きなイベントはめったにありませんから、みんなこれに懸けています。朝早くから、何万人もここに詰めかけるのですが、法要は午後からなので、午前中みんな退屈します。それで公慶さんは、まず午前これをこないみんなを満足させてから、午後からの法要も楽しんでもらう。

しかも芝居小屋、動物園も用意しています。100%信心だけで人が生きているわけではありませんから、この機会に何か楽しいこともあってほしいわけですね。今も南大門の手前には土産物屋などがありますが、あの辺りに芝居小屋が 20 軒建っていました。ちょっと変わった動物も連れて来ました。

「北向きの荒神社より仁王門まで、茶屋、あやつり、歌舞伎、見世物、20 床もこれあり」と。北向きの荒神というのは、奈良国立博物館のところから大仏殿のほうに回っていく四つ角がありますよね。その辺りに江戸時代は荒神さんがあったんです。それを北向きの荒神と言っているんですけど。仁王門っていうのは南大門です。だから奈良国立博物館のこの角っこから南大門のところまで 20 軒ほどお店が出るようになるんですね。

そこまでやるのか、と思うのは、4 月 8 日に法要が終わるのですが、4 月 9 日以降も来る人がいるであろうと見越して、芝居小屋を 15 日まで延長させた。遅れてきた人も法要は見られないけど、大仏様は見られるし、芝居を見て、「ああ奈良に行って楽しかった」と思って帰ってもらえるようにしたいと。

この法要の影響は大阪にも広がり、大阪道頓堀の芝居物 30 日のうち見物人無しです。みんな奈良に行ったのですね。「猿沢の池のコイやフナは餌をやっても浮かんでこない、古今これなきことなり」「池の近辺でえさを売る者 100 両余り」。100 両というのが今の 1 千万。「大阪の高麗橋から奈良まで人の切れ目なし」。大阪から、せっかく急行の駕籠に乗ったのに、結局渋滞しているから進めなくて同じだった、と書いてある。

木津川の渡し守は 31 日間で 6 万人を渡したと。渡し守も儲かったので、大仏のおかげで儲かったとかなりの金額を東大寺に寄進してくれた。それから、他の寺も指をくわえて見ているわけではない。元興寺、唐招提寺、薬師寺、極楽院、春日大社、興福寺、西大寺。元興寺はご開帳して 500 貫文。唐招提寺は 1630 貫文と銀 20 貫文。薬師寺はその半分なんですけど、実はこれは、薬師寺は奈良が今そういう状況になっていることに途中まで気付いていなかったからです。春日大社は何もしないけど、すぐ横だからすごいお賽銭があったのです。興福寺も普通の参拝客の 100 倍の人が来たとかですね。西大寺は、豊心丹という薬の販売をしていたんです。本当に奈良全体が潤う。これが大事です。

先ほど正倉院展の話をしましたけど、私は、正倉院展は奈良国立博物館の展覧会とは考えていないんです。正倉院展は奈良の展覧会であって、奈良国立博物館は単なる会場に過ぎないと思っておりますから、その時に奈良全体が潤わなければ駄目。奈良全体の人々が喜ばなければ、奈良国立博物館だけどんな

に潤ったって意味ないです。だからこれは奈良の展覧会です。

実は昭和 21 年に正倉院展はスタートしたのですが、それから正倉院展の会期中、寺社仏閣では特別公開、宝物公開をやっています。今年で第 64 回ですけど、1 回目から奈良全体がお祭りというふうになっているんです。みんなが潤うことを考えなきゃいけない。

ちなみに、4 月 8 日に法要が終わって、その翌日 4 月 9 日。公慶さんは、久しぶりに横になって寝ます。1686 年から 92 年まで 6 年間公慶さんは横にならなかった。夜寝るときも座って寝た。大仏さんがあんな状態なのに、どうして自分だけ安眠していいだろうか。「私は安眠しない。夜寝るときは座って寝る」と心に誓うわけです。そして 6 年間横にならなかった。

しらみつぶしに勧進に回っているんで、夕方になったら疲れ切っているはずだと思いますけど。それでも自分が横になることを自分に許さなかった。そんな生活が祟って死ぬんですよ。でもそういう人だから、100 年間誰も出来なかった大仏復興を、公慶だけが出来た。

人間の数だけいたって駄目ですよ。その人間がどれほどの人であるかにかかっているんです。

そして、4 月 9 日、久しぶりに寝た。実はこのあと本当に病気になるんですよ。数カ月病気になる。横になったのが悪かったんですかね（笑）。そのままずっともう座っていたほうが良かったんです。横になるともうどっと疲れて。

さて大仏の修復に 1 万 2 千両、これは今のお金でおよそ 12 億です。次は大仏殿ですが、再建には 18 万両です。今のお金で 180 億。桁違いにかかるわけです。公慶さんは病気が治ってまた 1 人で勧進を始めました。江戸に行き、青森、東北、北陸、中国、九州、ずっとたった 1 人で回っていくんですね。実は公慶さんのお姉さんが興福院の尼さんで、興福院には公慶さんのゆかりの物がいろいろ残っています。興福院の茶室の天井には、勧進帳が張ってあります。

そしてこの大仏殿勧進帳にはこんな言葉が記されています。「一針一草の喜捨」、1 本の針でもいい、1 本の草でもいいと書いてあるんです。全く聖武天皇、重源さんと一緒ですね。1 本の草というのは聖武天皇そのものだし、1 本の針というのは重源さんが寸鉄でもいいと言ったが、一緒です。聖武天皇から重源までおよそ 400 年、重源さんから公慶さんまでまたおよそ 500 年。合わせて 900 年ぐらいたっているんですけど、同じ思いがずっと続いているわけです。

公慶さんは、将軍・綱吉とその母桂昌院に会った。そうしたら親子で公慶さんにぞっこんになりポケットマネーを出してくれたんです。そういう魅力があるんですね。非常に優れた学僧であり、また篤い信仰を持ち、かつ優れたプランナーでありプロデューサーであり、そして身を粉にして働くことを全く厭わない人なんです。

それから亡くなるぎりぎりまで、公慶さんは学僧としても大きな仕事をしています。興福寺維摩会、東大寺法華会、そういうこの勉強会で大事な役を務めるなど、学僧としても最後まで続いた人物です。

さっきは聖武天皇の像を造った話をしましたが、重源さんのことも、自分の大先輩ですからすごく敬愛しているんです。重源さんをお祭りするための大きなお堂を造りました。

やっぱり世話になった人というか、先輩、先人を大事にするということは大事です。そういう感謝の

気持ちというのはすごく大事ですね。公慶さんはどこまであらゆることに配慮ができる人なんだろうと感心します。ここに重源さんのお像が設けられて、今はこのお像が奈良国立博物館で展示されている。

大仏殿を造るのには、木が 26,723 本必要だった。最終的に幕府が全面的に応援してくれるようになったが幕府は金が無い。だからそれを日本中の大名に振りました。日本中の大名がそれをまた領国内の人々に振ったわけです。1 人 1 人になると本当に数百円ぐらいのそれが日本じゅうから集まって、大仏殿再建のためのお金になっていったんです。東北から九州までの当時の日本人の大半の人が、大仏殿再建に実はわずかなお金を出している。それでお金も集まって、26,723 本の木を購入出来た。

最後にあと 1 つだけ、まだ難問が残っていた。大仏殿はとても屋根が大きくて、屋根にはすごい分量の瓦が載っています。瓦だけでも 3,000 トンの重さがあります。大仏さんの上に大きな木が水平に通っていて、これを大虹梁というんですが、この 2 本の大虹梁が屋根を支える構造になります。それはもう巨大なすごい強い 2 本の木が、屋根を支える構造になっているんです。この木が無いと屋根をかけられない。瓦を載せることができない。大仏殿ができない。でも日本にそんなに巨大で丈夫な木が無かったんです。

ちなみに今、興福寺が中金堂の再建をしています、あの木は全部アフリカのカメルーンから持ってきているんです。公慶さんは外国から買うわけにはいかない。それで日本中探して、宮崎県で発見したんですね。宮崎県と鹿児島県の県境に霧島というところがありますが、その山奥に巨大な木が 2 本。2 本ないと困るんだけど、2 本生えていたんです。

大仏殿に行ってみますと大きな柱がいっぱい立っているけど、実はあれは継いでいるんですね。あんな太い木じゃなくて、実は真ん中に木があってその周りを別の木で巻いているんです。しかし垂直の台はそれで持つんだけど、水平台は力がかかるから継いだ木ではとてももたない。

宮崎県と鹿児島県からそれを奈良まで運んで来たんです。これは 54 メートルの木なんです。大仏殿の高さが 47 メートル、興福寺の五重の塔が 50 メートル、それより高い 54 メートルの赤松 2 本を霧島で見つけた。ここが霧島で、おそらくこういうルートで鹿児島湾までまず出した。それに 115 日かかった。それは幕府の命令で薩摩藩が応援してくれていて、延べ 10 万人が動員された。1 日平均 870 人、牛延べ 4000 頭、1 日平均 35 頭が木を引く。たぶんここを引いたんじゃないかと思うのですが、実は資料が残っていないので……薩摩藩は明治維新の際、江戸時代の資料を全部処分したんです。だから、延べ 10 万人を動員して、どういうふうにしたのか全く分からない。でも、たぶんこのルートだろうと思うルートがあります。

ここからは、いかだにして船で鹿児島まで引いたんですね。ここからが難しいんです。向こうに見えるのが桜島。ここまでは来ただけで、いかだの状態では九州から瀬戸内海まで入れない。九州の左右が、波が荒いので、いかだの状態ではすぐ持っていかれてしまう。千石船に乗せていくのですが、2 本同時に積まないといっくり返る。今だったら、2 台のクレーンで同時に積めるんだけど、江戸時代はそんなの無いですから。

こちらに志布志という町があって、その廻船問屋の山下弥五郎という人が引き受けたのですが、2

本の巨木を同時に船に積むにはどうしたらいいか、すごく悩むわけですね。どうしたかという、満潮時に逆に千石船を沈めるんです。その沈んでいる船の上に木を持ってくるんですね。今度は潮が引いてくるときに、2 艘の五百石船で千石船をゆっくり引き上げていく。そして水をかき出す。そうすると浮上して行って、上にちゃんと 2 本の木が最初から待っているわけです。それをくくり付けるというやり方でできたんです。それは実は、先ほどの志布志の弥五郎の娘が「おとうちゃん、夢を見た。観音様がこういうふうにしなさいと言ってくれた」と言ったのがこのやり方なんです。この鹿児島湾で、今から 300 年前にこんなことがおこなわれていたんですね。

千石船に積んで鹿児島を出て、この鹿児島湾の先端、山川という所でちょうど台風が来たのでしばらく待ちまして。台風が通り過ぎた時、まだ波の荒いのが残っているのを利用して、一気に行くんですね。

瀬戸内海に入って、兵庫、大阪まで来て、そこでまた船を沈めて紐を切って、淀川に入って木津川に入って、木津まで引いてきて陸揚げして、あとはこんなふうに人力で引いたんです。本当に大きな木なんです。これでようやく今 1 本終わるところですね。

もう 1 本は 1704 年、今から 308 年前、8 月 19 日～9 月 5 日まで、寄進曳きと称して、奈良から毎日千数百人がボランティアで木を引きに行ったんです。大仏さんも、わずかな小さな力をたくさん集めてできた。そして大虹梁もまた、奈良の多くの人たちが毎日ボランティアで木を引いて、大仏殿は出来ることになるんです。こういう事業をしないといかんですな。

大仏殿に入るたびに、どれがその木なんだろうと思っていると、東大寺の坊さんから、天井のもっと上にあると教えてもらい、観に行くことになりました。実は明治に大仏殿は修理しているので、今は鉄骨も入っていて、鉄骨と大虹梁と一緒に屋根を支える構造になっているんです。

大虹梁が届き、これで最後の難関を越えたわけです。あとは屋根を架けて、瓦を載せたら終わり。そこで公慶さんは死んだんです。58 歳、当時の記録には「辛勞相積の故」だと。東大寺の裏手に五劫院というお寺がありますが、そこにお墓があります。皆さんぜひお参りに行っていただきたい。

亡くなる 3 年前の 55 歳で公慶さんの後継ぎができた。公盛さん、14 歳。41 歳違い、親子より離れているぐらいですね。お世話になったので幕府にお礼に行くために、公慶さんと公盛さんと 2 人で江戸に行ったんです。そこで急死したんです。公慶さんは「奈良に葬ってくれ」と遺言を残したんですが、江戸時代、江戸で死んだ人は江戸で葬られるという厳然たる決まりがあった。参勤交代で江戸に来ていた大名のみ、自分の国に戻して葬ることができる。公盛さんは将軍などに働きかけ、特別に奈良に葬ることを許された。

この大仏殿の横に、公慶さんをお祭りしている公慶堂があるんです。その像を見るとびっくりしますよ。顔、目が真っ赤です。本当にもう病気だったんでしょう。亡くなった直後にそっくりに造ったものなんです。だから本当にこんな目が赤かったんですよ。その公慶さんのお像の視線の先には、大仏殿の大屋根が見えます。おそらく後を継いだ公盛さんが、先生に大仏殿の屋根を見てもらいたくて、そちらに向けてお像を安置したのではないかと思います。

公盛さんはそのあと、中門を造った。でもそこで死ぬんです。まだ 36 ぐらいだった。そして公盛の

後を継いだ公俊という人が、大仏殿の周りの回廊を半分つくり、そして後を継いだ庸訓という人が残りの半分の回廊を造って、大仏殿は本当に完成した。その年は公慶さんの 33 回忌にあたっていました。本当に長い年月を、公慶が死に、後を継いだ公盛が死に、公俊が死に、次々と倒れていく。でもまたその志を継ぎ、次の人がやり続けて大仏殿は完成するのです。

こういう人たちの頑張りが無ければ、奈良に大仏殿はできなかった。大仏さんの顔も、もしかしたら木のままだったかもしれない。大仏ができ、大仏殿ができ、そして奈良にも大勢の人が来るようになった。そして、奈良は観光都市になった。でもほとんどの人は、公慶を知らない。公慶さんにどれほどのご恩があるのかを知らない。向こうに大仏殿が見えます。何も知らなければ「ああ大仏殿やな」というだけです。今、この話を知ると、あの大仏殿が見えるだけでも、胸がいっぱいになる。公慶さんはあの姿を知らない。そして外からは見えないけれど、今も大虹梁が鉄骨と協力しつつというのもあるけれど、屋根を支え続けている。大仏さん、お顔と体が違うのにはこのような深いわけがあったんです。

公慶さんの命日は 7 月 12 日。今は新暦に換算というのか 1 カ月遅れにして、東大寺では 8 月 12 日を公慶上人の命日としています。でも特に何も行事はありません。五劫院のお墓に東大寺のお坊さんが各自それぞれ、思い思いに自分でお参りに行くだけ。行事はやっていません。私は奈良で公慶さんの命日に何か行事をしたらいいんじゃないかと思っているんです。8 月 12 日というと燈花会の最中ですね。それだけでなくたくさん人が集まるその日に、奈良で何かをやろうと思う人たちにとっての大恩人である公慶さんの命日に、何か来年から行事ができないだろうか。この好契機を大事にすれば必ず好景気はくる……と思っている（笑）。

これで話を終わります。直接 NPO の話ではないといえませんが、でもきっとさまざま関係のあることが含まれていたのではないかと、自分では思っています。